

栄工田遺跡

- 店舗造成開発工事に伴う発掘調査報告書 -

2020.3

高知県南国市教育委員会

序

南国市は物部川と国分川に育まれた肥沃な香長平野に抱かれ、「土佐のまほろば」といわれるよう古くから人が生活を営むのに大変適した場所で、数多くの遺跡が所在します。代表的なものとして、旧石器時代の奥谷南遺跡に始まり、弥生時代の田村遺跡群、紀貫之の土佐日記にも記される土佐国衙跡、中世守護代細川氏の居館である田村城跡、長宗我部氏の居城である岡豊城跡などがあります。

そのなかで、栄工田遺跡は縄文時代から近世に至る複合遺跡であり、特に縄文時代の豊富な土器、石器類、古代の円面硯や楠葉型瓦器椀等の遺物が確認されています。高知県の歴史を語るうえでも重要な意味をもっています。

本書は平成29年度に行われた店舗造成工事に伴う栄工田遺跡発掘調査の成果をまとめたものです。特に、当遺跡で初めて弥生時代後期の竪穴建物跡が確認されたことや、古代・中世の遺跡の広がりが確認できたことは大きな成果です。今後広く利用され、文化財保護及び学術研究の一助になれば幸いです。

調査にあたりご指導を賜りました高知県教育委員会、(公財)高知県文化財団埋蔵文化財センター、また、発掘調査への深いご理解とご協力をいただいた周辺地区の方々、そして発掘・整理作業にご尽力いただいた作業員の皆様に心より厚くお礼申し上げます。

令和2年3月

南国市教育委員会
教育長 竹内 信人

例　言

1. 本書は、平成29年度に南国市教育委員会が実施した店舗造成開発工事に伴う榮エ田遺跡発掘調査の報告書である。
2. 榮エ田遺跡は、高知県南国市岡豊町小蓮に所在する。
3. 調査期間は以下のとおりである。
　試掘確認調査：平成27年6月22日～24日
　発掘調査：平成30年1月17日～3月29日
4. 発掘調査は、南国市教育委員会が主体となり、高知県教育委員会・(公財)高知県文化財団埋蔵文化財センターの協力を得て実施した。平成29年度の調査体制は以下のとおりである。
　調査員　油利崇（南国市教育委員会　生涯学習課　文化財係　主査）
5. 本書の執筆・編集は油利が行った。
6. 調査トレンチ、調査区番号については適宜設定した。遺構については、堅穴建物跡(ST)、掘立柱建物跡(SB)、土坑(SK)、溝(SD)、柱穴(P)で表示した。
　本書の標高は海拔高であり、方位は座標北を用いた。
7. 現場作業・整理作業においては、高知県教育委員会文化財課、(公財)高知県文化財団埋蔵文化財センター諸氏のご指導・ご教授を得た。記して深く謝意を表したい。
8. 発掘調査にあたっては、地元住民の方々のご理解・ご協力を得た。また、以下の現場作業員、整理作業員の方々のご協力を得た。記して深く謝意を表したい。
(敬称略、50音順)
　〔現場作業員〕大石幸雄、大和田延子、久家瑞、窪田泰詔、比山隆雄
　〔重機オペレーター〕森岡和信
　〔整理作業員〕大谷亜紀子、山中美香、山中美代子
9. 当調査の出土遺物は南国市教育委員会が保管している。遺跡の略号は17-SKである。

本文目次

第Ⅰ章 調査に至る経過と調査の方法	
1. 調査に至る経過	1
2. 遺跡の概要	1
3. 調査の方法	2
4. 試掘確認調査	2
第Ⅱ章 周辺の地理的・歴史的環境	
1. 地理的環境	5
2. 歴史的環境	5
第Ⅲ章 調査の成果	
1. 調査の概要	10
2. 検出遺構と出土遺物	
(1) 壺穴建物跡	12
(2) 土坑	12
(3) 溝状遺構	18
(4) その他の遺構・遺物	26
第Ⅳ章 総括	
1. 弥生時代	32
2. 古代	32
3. 中世・近世	32
4. まとめ	34

挿 図 目 次

図 1	南国市位置図	1
図 2	調査区配置図および試掘確認調査トレンチ配置図	2
図 3	栄エ田遺跡周辺の遺跡	7
図 4	調査区土層図	10
図 5	遺構配置図	11
図 6	ST1・2 遺構図	13
図 7	ST1・2 出土遺物実測図	14
図 8	SK1 遺構図	15
図 9	SK2・10 遺構図	16
図 10	SK12・17・18 遺構図	17
図 11	SD1・4 遺構図	19
図 12	SD2・3・7・SK11 遺構図	20
図 13	SD8・12・14・17・SK4・6・7・8・9 遺構図	21
図 14	SD8・12・14・17・SK8・9 土層図	22
図 15	SD13 遺構図	22
図 16	SD1・2・4・8 出土遺物実測図	23
図 17	SD17・18 出土遺物実測図	25
図 18	SX1・SD16・18・SK15・16 遺構図	27
図 19	SX1 出土遺物実測図	28
図 20	包含層その他出土遺物実測図	28

表 目 次

表 1	出土土器観察表	29
表 2	出土土製品観察表	31
表 3	出土石器観察表	31
表 4	出土鉄器観察表	31

写真図版目次

図版1	調査前全景(南東から) 調査前全景(西から) 1A区遺構検出状況(南西から) 1A区東遺構検出状況(北東から) 1B区遺構検出状況(南西から) 2区遺構検出状況(南から) 2区遺構検出状況(南西から) 2区遺構検出状況(南西から)	図版8	1A区SK2・10完掘状況(南から) 1A区SK11完掘状況(南から) 1B区SK12土層堆積状況(南西から) 2区SK15土層堆積状況(南から) 2区SK16土層堆積状況(南東から) 2区SK17土層堆積状況(南東から) 2区SK17完掘状況(南から) 2区SK18完掘状況(南西から)
図版2	1A区東遺構完掘状況(南西から) 1A区東遺構完掘状況(北東から)	図版9	1A区SD1・4～6完掘状況(南から) 1A区SD1完掘状況(北から)
図版3	1B区遺構完掘状況(南東から) 1B区遺構完掘状況(南西から)		1A区SD2・3検出状況(南東から) 1A区SD2・3完掘状況(南東から)
図版4	2区遺構完掘状況(北西から) 2区遺構完掘状況(南西から)		1A区SD2・3完掘状況(南西から) 1A区SD4完掘状況(東から)
図版5	2区遺構完掘状況(北東から) 1B区ST1・2完掘状況(南東から)		1A区SD4弥生土器(15)出土状況(東から) 1A区SD7土層堆積状況(西から)
図版6	1B区ST1・2完掘状況(西から) 1B区ST1・2切り合ひ検出状況(南から) 1B区ST1・2土層堆積状況(南東から) 1B区ST1壁際土層堆積状況(南西から) 1B区ST1土層堆積状況(南東から) 1B区ST1弥生土器(2)出土状況(東から) 1B区ST1弥生土器(5)出土状況(西から) 1B区ST1弥生土器(3)出土状況(西から)	図版10	1A区SD8・12検出状況(西から) 2区SD8検出状況(南から) 1A区SD8サブトレ断面土層堆積状況(南西から) 2区SD8土層堆積状況(南から) 2区SD8須恵器(30)出土状況(南から) 1A区SD8須恵器(38)出土状況(東から) 1A区SD8須恵器(33)出土状況(西から) 1A区SD8須恵器(40)出土状況(西から)
図版7	1A区SK4完掘状況(南から) 1A区SK6・7完掘状況(西から) 1A区SK7土層堆積状況(東から) 1A区SK8土層堆積状況(西から) 1A区SK8完掘状況(西から) 1A区SK9検出状況(南東から) 1A区SK9土層堆積状況(南から) 1A区SK9完掘状況(南東から)	図版11	1区SD8・14完掘状況(南西から) 1A区SD8完掘状況(南西から) 1A区SD8・12完掘状況(西から) 2区SD8完掘状況(南東から) 1B区SD13土層堆積状況(西から) 1B区SD13完掘状況(南西から) 1B区SD14土層堆積状況(南から) 2区SD16土層堆積状況(南から)

- 図版12 2区SD17土層堆積状況(南東から)
2区SD17弥生土器(45)出土状況(南から)
2区SD18土層堆積状況(南から)
2区SD18須恵器(48)出土状況(北から)
2区SX1土層堆積状況(南西から)
2区SX1土層堆積状況(北西から)
2区SX1須恵器(52)出土状況(北から)
2区SX1完掘状況(北東から)
- 図版13 出土遺物1
- 図版14 出土遺物2
- 図版15 出土遺物3
- 図版16 出土遺物4

第Ⅰ章 調査に至る経過と調査の方法

1. 調査に至る経過

周知の埋蔵文化財包蔵地「栄工田遺跡」は南国市岡豊町に位置する縄文時代から近世にかけての複合遺跡である。

平成27年度に遺跡の範囲内で計画された民間の店舗造成工事に先立ち、南国市教育委員会が工事計画地の遺構・遺物の有無を確認し、遺跡の保護と開発事業との調整を図ることを目的として試掘確認調査を行った。調査の結果、弥生時代以降の遺構・遺物が確認されたため、事業者と協議を行った結果、造成工事により遺跡が影響を受ける範囲について記録保存の発掘調査を実施することとなった。本調査は事業者からの委託を受けて南国市教育委員会が調査主体となり、平成30年1月17日から3月29日に調査を実施した。

2. 遺跡の概要

栄工田遺跡の所在する岡豊地区は県内有数の古墳密集地帯で、栄工田遺跡の北部に連なる丘陵部には小蓮古墳や舟岩古墳群を中心とした多くの古墳が立地している。また、当遺跡の北には旧石器時代から近世まで続く奥谷南遺跡がある。旧石器時代は多数の細石刃やナイフ形石器が散布する岩陰遺跡であり、縄文時代の貯蔵穴や弥生時代の集落および墓域も確認されている。



図1 南国市位置図

古代にはロストル構造の窯跡や山岳寺院関連施設もあり、多様な成果が報告されている。一方で、今回調査した栄工田遺跡は縄文時代～近世にかけて連綿と遺構・遺物が確認されている複合遺跡で、平成5年度には四国横断自動車道建設に伴って高知県埋蔵文化財センターによる調査もされている。そこでは、縄文時代後期～晩期・弥生時代前期末・後期末・古代と空白期を挟んでの集落形成がなされており、縄文～弥生移行期の様相は注目される。また、舌状に張り出した丘陵縁辺部に位置するI区では弥生時代から古代にかけての良好な包含層が確認され、丘陵上に集落の存在が指摘されている。今回の調査対象地はそこから丘陵を挟んで東側の丘陵裾部に位置する。

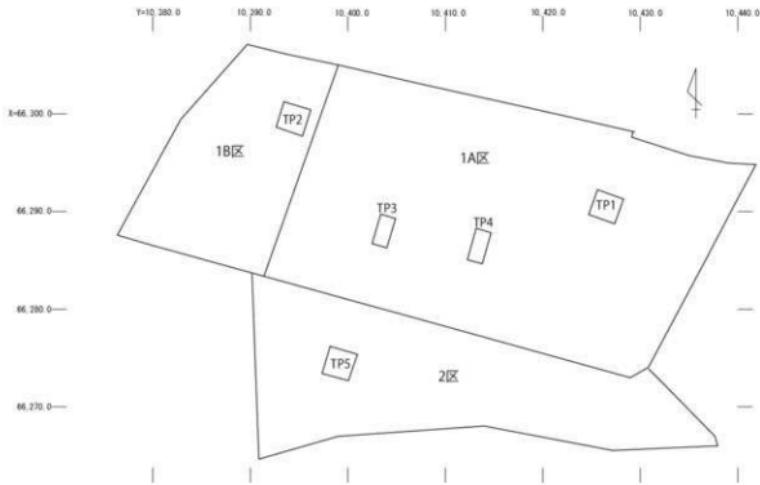


図2 調査区位置図および試掘確認調査トレンチ配置図

3. 調査の方法（図2）

今回の発掘調査では、事前に試掘確認調査を行い遺跡の存在する範囲、深さ等を確認したうえで工事により影響を受ける範囲を本調査の対象とし、平成30年1月から実施した。

調査にあたっては、世界測地系公共座標第IV系に基づく基準点を設置し、遺構図面を作成した。

また、廃土置場が調査区内に必要であるため便宜的に調査区を分割した。北の上段東側を1A区、西側を1B区、南側の下段を2区として、順次調査を行った。

4. 試掘確認調査（図3・4）

試掘確認調査は、平成27年6月22日～24日に実施した。

試掘確認調査の時点では、工事内容が決まっていなかったため、対象地全城に3m×3mを基本とする調査トレンチを5か所設定した。その結果、4地点において遺構、遺物が確認されたため、掘削を伴う工事範囲については本調査が必要と判断した。

TP1は調査対象地北東部の3m×3mのトレンチである。1層耕作土、2層水田床土で、3層は暗褐色シルトの包含層である。3層の遺物量は少なく、弥生土器・須恵器等を含んでいる。遺構は4層上面で溝（本報告SD7の一部）を検出した。東西方向に延びており、幅36cm、深さ約10cmである。埋土は暗褐色砂質シルトで包含層より粒子が粗い。遺物は土器細片3点のみで時期は不明である。底面がピット状に深くなる部分がある。

TP2は調査対象地北西部の3m×3mのトレンチである。1層耕作土、2層水田床土で、3層に

ぶい黒色シルトを掘り込んで縦横に3本の溝状の掘り込みを確認した。床土と同じ埋土であるため、新しい時期の耕作に関わるものと判断した。3層は包含層で、層厚は10cmに満たない。遺物は弥生土器・須恵器等が出土した。遺構は淡褐色シルトを掘り込んだ溝（本報告SD14の一部）を検出した。南北方向に延びた溝で、東肩が調査区外のため幅は不明である。北壁での断面観察から、砂層とシルト層の互層堆積となっており、段階的に埋没したことが分かる。遺物は土器細片4点のみで時期は不明である。上部が一部搅乱に切られているが、断面箱掘状で深さ約14cmである。底面レベルは南に向かって徐々に下がっている。

TP3は堆積状況確認のために設定した3m×0.8mのトレンチである。1層耕作土、2層水田床土で、3層は水田構築のための造成土である。4層は地山で、南に向かって緩やかに傾斜している。遺物は2層から須恵器壺片が1点出土したのみで、遺構は確認できなかった。

TP4は遺構の広がりを確認するために設定した3.2m×1.3mのトレンチである。1層耕作土、2層・3層は造成土である。地山は明青灰色粘土であり、それを掘り込んだ土坑（本報告SK10の一部）を検出した。平面円形で2段掘りになっている。外側の掘り込みは緩やかな断面皿状で、内側の掘り込みは断面箱状である。埋土は黒色粘土で、遺物は外面タタキ目の残る弥生土器が出土している。

TP5は調査対象地南部3m×3mのトレンチである。1層耕作土、2層水田床土、3層包含層である。3層を掘り込んでTP2で検出したものと同じ耕作に関わる溝状の搅乱を確認した。包含層は東側にサブトレンチを設定して深さを確認後掘削した。そのため、包含層と遺構埋土の区別なく掘削を行うこととなり、遺物の帰属層位ははっきりできない。しかし、全体的に遺構底面からの遺物出土が多かった。断面観察から、包含層は層厚10cm未満で、褐色シルト層を掘り込んで溝（本報告SX1の一部）が構築されている。南北方向に延びており、東肩が調査区外のため幅は計測できない。深さは約20cmで、底面レベルは北端より南端が約10cm低い。底面は非常に凸凹している。遺物は底面から平底の弥生土器底部が出土したほか、一部外面タタキ目の残る弥生土器も含んでいる。

これらの調査結果から、調査地対象地は傾斜地を水田としているため、上段は水平にするために山側を若干切土し、谷側を盛土造っている状況が確認できた。造成による地形変化は行われているものの、下層は良好に遺構面が残されていることが判明した。包含層は遺物量が少なく、流れ込みによるものが多いと思われる。遺構はTP1・2・5では規模の違いはあるが溝状遺構が確認された。また、TP4では土坑状の遺構が確認できた。時期はTP4・5の遺構出土土器から弥生時代後期に属する可能性が高い。全体的に遺物量は多くなく、明確な建物跡も確認できなかったため、この地区は集落縁辺部の様相を示していると思われる。

第Ⅱ章 周辺の地理的・歴史的環境

1. 地理的環境

栄工田遺跡の所在する南国市は、北緯 33 度 34 分、東経 133 度 38 分に位置し、東西約 12km、南北約 23km、面積 125.35km²を測る。高知県のほぼ中央部にあたり、東を香美市・香南市、西を高知市、北を土佐町・本山村と接し、南は土佐湾から太平洋に開ける。人口は 2020 年 1 月現在で 48,688 人である。主な産業は農業であり、かつては米の二期作の中心地であった。現在は 7 月の中旬には刈り入れを始める早場米の産地として知られている。海岸部では施設園芸が盛んなほか、十市のヤマモモ、白木谷の四方竹などの特産品も有名である。高知空港、高速道路、JR 土讃線、ごめんなはり線、路面電車などの交通の結節点であり、高知新港も近く高知県の物流拠点としての役割をもつ。

市域の北半分は四国山地より連なる山地で占められる。その大部分は古生代ペルム紀の上八川層と白木谷層によって形成される。市域の北境界線付近では、上八川層の標高は約 800 m に達するが、南下するにつれて次第に高度を下げ、白木谷層では標高 300 ~ 400 m となり、やがて標高 150 m 前後の丘陵となって、ついには平野に没してゆく。

市域の南半分を占める平野部は、物部川や国分川・舟入川の堆積作用により形成された扇状地であるが、高知平野の東部を占め、長岡郡と香美郡にまたがることから香長平野とも呼ばれている。香長平野は、舟入川を境に北側を古期扇状地、南側を新期扇状地に二分できる。古期扇状地は洪積世の最終水期に形成された疊層堆積物でおおわれており、長岡台地と呼ばれている。土佐国分寺跡や土佐国分寺跡、比江庵寺跡などは長岡台地上に立地している。一方、新期扇状地は物部川の堆積作用による沖積平野であり、香長平野の大部分を占める。ここでは自然堤防がよく発達し、その上には南四国における弥生時代の拠点的集落である田村遺跡群をはじめ、弥生時代の集落跡が多数分布している。

栄工田遺跡は南国市の平野部北端に位置し、北には奥谷南遺跡を始めとする丘陵地帯が横たわっている。この丘陵部には舟岩古墳群や小蓮古墳などの古墳が密集している。遺跡から東を臨むと長宗我部氏の居城である岡豊城跡があり、中世には土佐の中心として栄えた地域である。

2. 歴史的環境

南国市は洪積平野と沖積平野を有し、古くから人々の生活に適した地であった。その営みの痕跡である遺跡の数は 297 にのぼる。これは高知県の遺跡総数の約 1 割を占め、県下で最も遺跡の分布が集中する地域である。平野部を中心に旧石器時代以降の各時代の遺跡の存在が知られており、それぞれの時代について概観する。

①旧石器時代

高知平野周辺では、南国市との境である高知市介良の高間原古墳群 1 号墳の石室流入土中より出土した 1 点の細石器が知られるのみであり、「旧石器の空白地帯」と称されるほどその様相はほとんど判明していなかった。平成 6 ~ 8 年にかけて四国横断自動車道の建設に伴う発掘調査が行われた奥谷南遺跡（南国市岡豊町）において、細石刃 400 点、細石核 150 点、ナイフ形石器 50 点など

が出土した。AT 上層にナイフ形石器の 2 枚の文化層があり、旧石器時代終末の細石器文化期の遺物が集中し、層中から植物食利用を示す叩石が共伴することが明らかになった。

②縄文時代

縄文時代の遺跡は県西部の四万十川流域に比べて少なく、数ヶ所が確認されているにすぎない。

奥谷南遺跡では草創期～中期の土器、中期末の堅果類の貯蔵穴が出土した。奥谷南遺跡の南麓である栄工田遺跡（南国市岡豊町）からは、後期初頭～晩期終末の土器と共に 30 点程の磨製石斧が出土した。これらの遺跡は、丘陵部が平野部に接する地に立地しており、狩猟・採集に適した地域である。南の平野部では、田村遺跡群（南国市田村）の第 1 期調査（1980～1983 年）で後期の彦崎 K I 式土器が、第 2 期調査（1997～2000 年）で鐘崎式土器が出土し、九州との関連が窺える。

③弥生時代

弥生時代になると遺跡数とその規模は、急激に発展する。稲作に適した広大な沖積平野を有することから、平野部のほぼ全域に遺跡が展開している。

なかでも田村遺跡群は、その規模において群を抜いており、高知平野における拠点的母村集落と考えられる。第 1 期調査では前期初頭の集落跡と小区画水田跡、中期末から後期前半の集落跡が出土し、検出された堅穴建物跡は 60 棟、掘立柱建物跡も 14 棟にのぼる。第 2 期調査では前期の環濠集落と前期末～中期前半の集落、中期後半～後期中葉の集落が移動を伴って変遷している様子が確認された。第 3 期調査では遺跡の範囲が大きく北に拡大することが判明し、他調査区でほとんど検出されなかった弥生時代後期末～古墳時代前期初頭の遺構も確認された。これまで検出された堅穴建物跡は合計で 495 棟となり、屈指の大規模集落である。

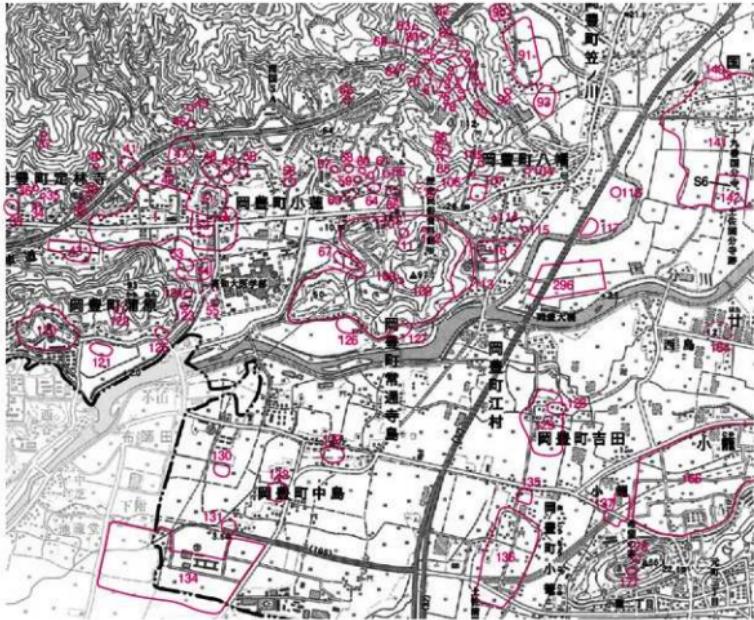
田村遺跡群周辺の地域や中小河川流域では、前期後半～末葉にかけて小規模ながら大築遺跡（南国市大塙）、栄工田遺跡、岩村遺跡（南国市福船）などの遺跡が散見されるようになる。

中期になると遺跡数は一転して激減し、特に中期前半の遺構は高知平野ではほとんど見られなくなり、田村遺跡群で土坑や堅穴住居が少数確認されているのみである。中期後半～後期中葉にはピークを迎えた田村遺跡群が衰退する一方、周辺部にあたる東崎遺跡（南国市東崎）、岩村遺跡、小籠遺跡（南国市岡豊町）などの中小集落が後期中葉から終末にかけて成立し、高知平野一帯に爆発的に展開していく。

④古墳時代

南国市岡豊町・久礼田・植田の平野と接する丘陵部は高知県最大の後期古墳の密集地である。なかでも小蓮古墳は県下最大の横穴式石室をもつ円墳であり、香長平野北部を中心とする有力豪族の墳墓と考えられる。22 基の古墳からなる県下最大の群集墳である舟岩古墳群もこの地域に築造されている。従来、高知平野における前期古墳はその存在が全く知られてなかったが、平成 6 年の四国横断自動車道に伴う長畝古墳群（南国市岡豊町）の調査で、同一丘陵上から 4 世紀前半・5 世紀後半・6 世紀前半の古墳（長畝 2～4 号墳）が確認された。

集落は弥生時代後期終末から引き続き営まれる古墳時代初頭の集落は香長平野で数多く調査されている。古墳時代中期以降の調査例は少ないが、土佐国衙跡（南国市比江）ではこれまでの調査で 42 棟の堅穴建物跡が出土している。



(Scale 1:25,000)

No.	遺跡名	時代	No.	遺跡名	時代	No.	遺跡名	時代
1	栄工田遺跡	縄文～近世	63	石谷土居城跡	中世	122	蒲原山中古墳	古墳
33	渓本遺跡	古墳・近世	64	天神の前遺跡	縄文・古墳	123	蒲原山東1号墳	古墳
34	芝の前1号墳	古 墳	65	天神の前古墳	古 境	124	蒲原山東2号墳	古 境
35	芝の前2号墳	古 境	66	蓬如寺跡	中世	125	蒲原屋敷遺跡	中世
36	芝の前3号墳	古 境	67	下野土居城跡	中世	126	天神丸遺跡	古墳～中世
37	長歌1号墳	古 境	68～84	舟岩古墳群	古 境	127	桑名屋敷遺跡	中世
38	長歌遺跡	弥 生	85	狭間古墳	古 境	128	吉田土居城跡	中世
39	長歌古墳群	古 境	86	狭間遺跡	弥 生	129	吉田濱遺跡	古墳～中世
40	野津古古墳	古 境	87	谷土居遺跡	中世	130	中島町田遺跡	古墳～平安
41	藤ヶ井遺跡	弥 生	90	西村土居城跡	中世	131	カツツ池遺跡	中世
42	杉ノ木遺跡	古墳～平安	91	西村遺跡	弥生～平安	132	内中土居城跡	中世
43	大畠遺跡	縄文～平安	92	西村古墳	古 境	133	中島土居城跡	中世
45	奥谷北遺跡	縄 文	93	西ノ久保遺跡	弥生～平安	134	ミト口遺跡	弥 生
46	唐龍の傳廟	近 世	104	籠本1号墳	古 境	135	小篠土居城跡	中世
47	奥谷南遺跡	縄 文	105	籠本2号墳	古 境	136	小篠遺跡	弥生～近世
48	宮ノ前遺跡	弥生～平安	106	籠本3号墳	古 境	137	小篠北遺跡	縄文・古墳～近世
49	小野土居城跡	中 世	107	籠本城跡	古墳～平安	140	国分大塚古墳	古 境
50	小山田遺跡	弥生～中世	108	岡豊城跡	中 世	141	国分寺遺跡群	古墳～近世
51	小野古城跡	中 世	109	岡豊城跡古墳	古 境	142	土佐国分寺跡	奈良～平安
52	千頭屋敷遺跡	中 世	110	伝・長宗我部一族の墓所	中 世	166	祈年遺跡	弥生～近世
53	庭添屋敷遺跡	中 世	111	伝・長宗我部一族の寺跡	中 世	177	越戸1号墳	古 境
54	清山遺跡	弥生～中世	112	伝・香川五郎次郎親和の墓	中 世	178	越戸2号墳	古 境
55	山崎遺跡	古 境	113	西谷遺跡	中 世	180	坂折山1・2号墳	古 境
56	岩原谷遺跡	弥生～平安	114	米内古墳	古 境	181	年越山1号墳	古 境
57	大岩遺跡	近 世	115	谷秦山先帝の地	近 世	182	年越山2号墳	古 境
58	梅ノ木遺跡	弥 生	116	市場遺跡	中 世	183	年越山3号墳	古 境
59	小瀬古墳	古 境	117	八幡落矢遺跡	古墳～中世	184	野中庵寺跡	平 安
60	小瀬2号墳	古 境	118	八幡落矢古墓	中世～近世	296	市屋敷遺跡	中世
61	小瀬3号墳	古 境	120	木ノ下遺跡	弥生～古墳			
62	小瀬4号墳	古 境	121	土居ノ前遺跡	弥生～古墳			

図3 栄工田遺跡周辺の遺跡

⑥古代

古代の律令制度のもとでの土佐国を伝える遺跡として、比江廃寺跡や土佐国衙跡、土佐国分寺跡が所在しており、古代土佐の政治・文化の中心地であったことを示している。

比江廃寺跡（南国市比江）は白鳳時代の瓦が出土した寺院跡であり、現存している塔心礎は原位置を保っており、8世紀以降に据えられたことが発掘調査により確認された。土佐国衙跡では、昭和54年から31次にわたる確認調査が行われ、官衙を構成すると考えられる掘立柱建物群などが検出されているが、政府などの国衙中枢の遺構は確認できていない。土佐国衙跡の北方1kmに位置する白猪田遺跡（南国市久礼田）では地鎮祭祀の跡や縁軸輪花皿が出土し、「国府集落」としての性格づけがなされている。土佐国分寺跡（南国市国分）では現状変更に伴う調査および伽藍配置確認のための調査が行われ、礎石建物跡、掘立柱建物跡などが検出されている。

⑥中世

中世になると遺跡数も増加し、分布も平野部の城館跡や山麓部の山城跡などほぼ全域にわたる。現在確認されている南国市内の中世城館跡は47ヶ所にのぼる。これらに伴い生活域も拡散し、現在我々が目にしている景観の基礎がほぼ形成された。

長宗我部氏の居城であった岡豊城跡は詰、二ノ段、三ノ段などから礎石建物跡が検出され、史跡公園として整備されている。近年、南斜面の伝家老屋敷曲輪の調査も進められ、国分川から詰への登城ルートが推定されている。岩村土居城跡（南国市福船）では城を囲む2重の堀が発掘された。この堀は出土遺物から14～15世紀に機能していたと考えられる。

田村城跡は14～15世紀の守護代細川氏の居館であり、城郭は3重の堀で囲まれた複合城郭である。郭内には区画溝や掘立柱建物跡が存在しており、外堀の幅は4～5m、深さ3.5mを測り、この中からは土師質土器や護符が出土している。高知空港拡張に伴う田村遺跡群発掘調査では、田村城跡の南側で溝に囲まれた屋敷跡が31ヶ所検出されており、南北朝期に機能したもの、守護代細川氏の入部後に機能したもの、長宗我部氏の台頭期に機能したもの3時期に区分することができる。

⑦近世以降

山内氏の土佐入国による高知城築城以降、土佐の中心地は高知市域に移った。長岡台地は当時未墾の荒地であったが、藩政初期の野中兼山による新田開発の際、諸役・諸税御免として入植を奨励し、御免町が生まれた。今は後免と改められ、南国市の中心街となっている。

近年戦争遺跡を平和学習に積極的に活用していくという動きが全国的に見られているなか、陣山遺跡では海軍の通信所跡地が発掘され、砲弾類が多数出土した。向山防空陣地関連遺跡では、「本土決戦」に備えた尾根上の陣地の構造が明らかにされている。また南国市前浜には、旧高知海軍航空隊所属の飛行機の格納庫であった掩体が7基残存しており、平成18年2月に南国市史跡「前浜掩体群」として指定された。

参考文献

- 『南国市史 上巻・下巻』南国市教育委員会 1979年
- 松村信博『奥谷南遺跡Ⅰ』(財)高知県文化財団埋蔵文化財センター 1999年
- 松村信博『栄工田遺跡』(財)高知県文化財団埋蔵文化財センター 1995年
- 『高知空港拡張整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 田村遺跡群』高知県教育委員会 1986年
- 『田村遺跡群Ⅱ』(財)高知県文化財団埋蔵文化財センター 2004年
- 『田村遺跡群Ⅲ』(公財)高知県文化財団埋蔵文化財センター 2015年
- 出原恵三『小籠遺跡Ⅲ』(財)高知県文化財団埋蔵文化財センター 1997年
- 廣田佳久・池澤俊幸『長畠古墳群 高知自動車道(南国～伊野)建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書』
(財)高知県文化財団埋蔵文化財センター 1996年
- 『土佐国衙跡発掘調査報告書 第1～11集』高知県教育委員会・南国市教育委員会 1980～1991年
- 三谷民雄『白猪田遺跡』南国市教育委員会 1997年
- 山本哲也『土佐国分寺跡 第1～3次発掘調査概報』南国市教育委員会 1988～1991年
- 宅間一之『高知県南国市 中世城館跡』南国市教育委員会 1985年
- 三谷民雄『岩村遺跡群Ⅲ』南国市教育委員会 1998年
- 三谷民雄『岩村遺跡群Ⅳ』南国市教育委員会 1999年
- 森田尚宏・松田直則・岡本桂典『岡豊城跡』高知県教育委員会 1990年
- 出原恵三・吉成承三・浜田恵子・佐竹 寛『陣山遺跡、陣山北三区遺跡』
(財)高知県文化財団埋蔵文化財センター 1997年
- 浜田恵子他『小籠遺跡Ⅲ』(財)高知県文化財団埋蔵文化財センター 1997年
- 久家隆芳『岡豊城跡Ⅲ』(財)高知県文化財団埋蔵文化財センター 2002年
- 廣田佳久・小野由香『西野々遺跡Ⅰ』(財)高知県文化財団埋蔵文化財センター 2008年
- 廣田佳久『西野々遺跡Ⅱ』(財)高知県文化財団埋蔵文化財センター 2011年
- 廣田佳久『西野々遺跡Ⅲ』(財)高知県文化財団埋蔵文化財センター 2011年
- 出原恵三『向山戦争遺跡』(財)高知県文化財団埋蔵文化財センター 2012年
- 松本安紀彦『祈年遺跡Ⅰ』(財)高知県文化財団埋蔵文化財センター 2011年
- 近藤孝文『祈年遺跡Ⅱ』(財)高知県文化財団埋蔵文化財センター 2012年
- 前田光雄『祈年遺跡Ⅲ』(財)高知県文化財団埋蔵文化財センター 2012年
- 前田光雄『祈年遺跡Ⅳ』(公財)高知県文化財団埋蔵文化財センター 2012年

第Ⅲ章 調査の成果

1. 調査の概要

今回の調査では、1,528m²を調査し、竪穴建物跡2棟、土坑18基、溝17条、性格不明遺構1基等が検出された。時期としては、判別できないものも多いが、弥生時代・古代・中世・近世のいずれかに属する。調査対象地はもともと南北に3枚の耕作地に分かれていたものを北の2枚を大規模に造成して合築しており、北の調査区は擾乱が多い。特に1A区の南部および2区東半部は大きく削平を受けており、遺構・遺物がほとんど確認できなかった。調査区全域で包含層はほとんどなく、耕作土、造成土を除去すると地山面となり、すべての遺構は地山上面で検出した。基本層序は1層耕作土、2層淡灰褐色粘土、3層暗褐色粘土（包含層）、4層地山である。

調査区中央部には南北方向の小さな谷地形があり、グライ化した粘土が堆積している。谷底部は遺構が希薄であり、谷東西の緩斜面に南北方向の溝などの遺構が広がっている。調査を進めるにあたって、調査区北部から若干の湧水があったため、必要に応じて排水のためのトレンチを掘削して調査した。

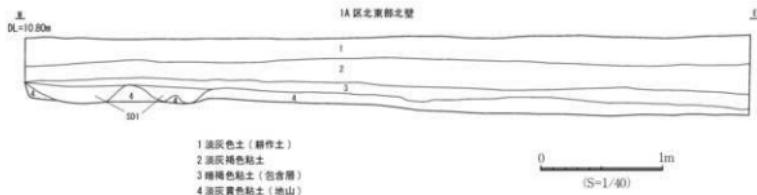
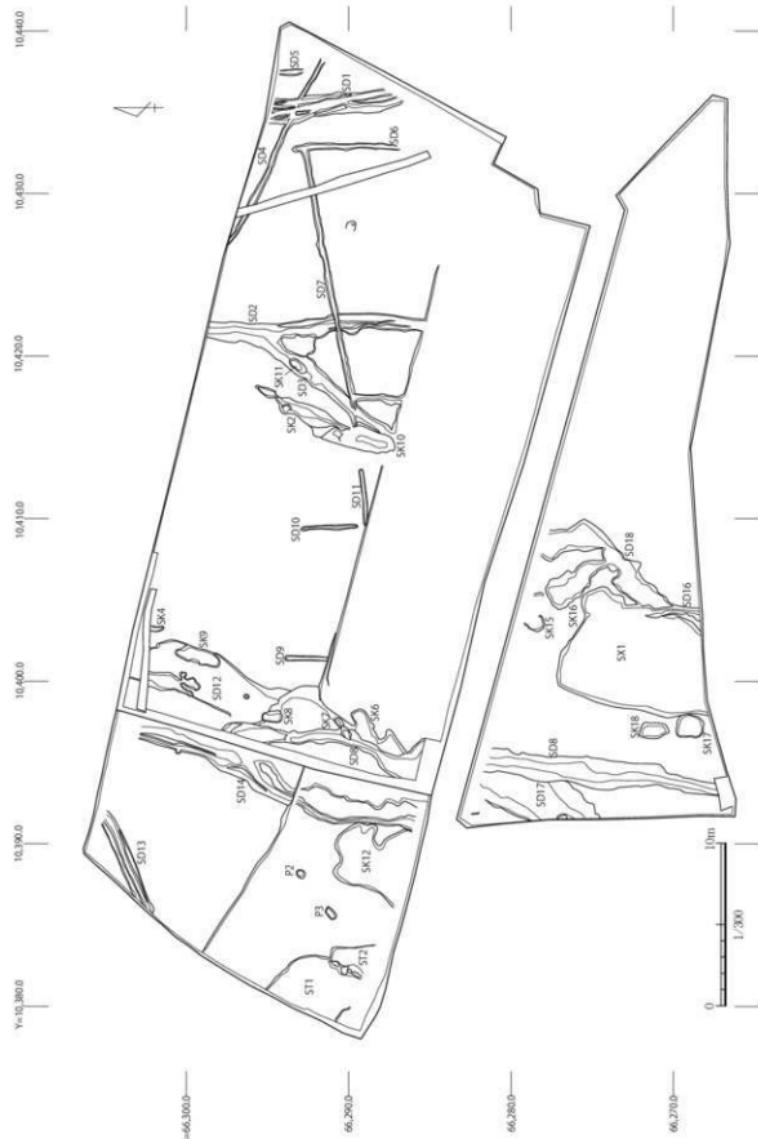


図4 調査区土層図

图 5 遗構配置図



2. 検出遺構と出土遺物

(1) 壁穴建物跡

ST1・2 (図6・7)

1B 区南西隅に位置し、大部分は調査区外である。ともに南側は造成の際に搅乱されているため残っていない。切り合い関係は ST1 が ST2 を切っている。ST2 と切り合っている部分の ST1 の壁は地山土に類似した白色粘土を積み上げて構築しており、ST2 廃絶後まもなく ST1 を建てるために粘土を貼って壁を作ったことが考えられる。平面プランは、ST1 は直線的な部分があるため、隅丸方形もしくは多角形の可能性がある。ST2 は、ST1 より床面の高さがやや低く、ST1 の床面に残された痕跡をたどると隅丸方形と推測できる。検出した範囲の規模は ST1 が南北 4.5 m 以上、東西 3.5m 以上、深さ 37cm で、ST2 は東西、南北とも 2.3m 以上、深さ 40cm である。いずれの床面からも中央ピットや主柱穴などの付属遺構は検出されなかった。

遺物は ST1 から約 500 点、ST2 から約 230 点出土したうち、ST1 から出土した弥生土器 6 点、ST2 から出土した石器 1 点を図示した。ST2 出土土器は細片が多く、図示し得るものはなかったが、土器の調整等は図示したものに類似している。1～3 は壺胴底部である。いずれも痕跡的な底部で外面タタキ後ハケ目を施される。4 は壺である。5・6 は鉢である。6 は深手の鉢の胴底部で外面タタキを施される。7 はチャートの石鎌である。基部と先端を一部欠損している。また、図示していないが ST1 からやや扁平な軽石のような遺物が出土している（写真図版 16-69）。

(2) 土坑

全部で 12 基の土坑を検出した。なお、調査過程で欠番とした遺構については記載していない。いずれの土坑からも遺物は土器細片が出土したのみで図示できるものはなかった。

SK1 (図8)

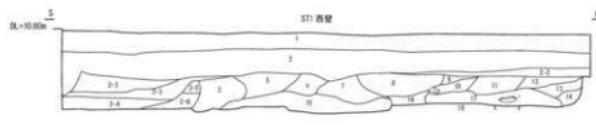
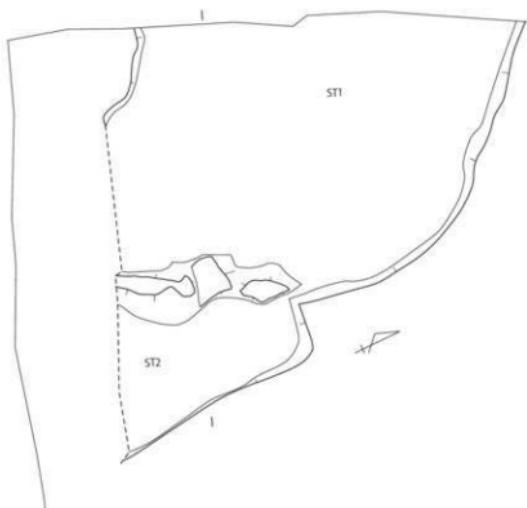
1A 区の試掘トレンチ TP1 東側に隣接して検出した。平面プランは直径 50～60cm の不整円形で、深さ 31cm であった。埋土は黒褐色土である。遺物は全く含んでいなかった。

SK2・10 (図9)

1A 区 SD3 の西側に位置する。SK2 は不整形な長楕円形プランを呈し、長軸約 600cm、短軸 120cm、深さ 10cm である。埋土は暗褐色土である。遺物は土器が 184 点出土したが、図示できるものはなかった。SK10 は SK2 と SD3 に接し、長軸 458cm、短軸 140cm、深さ 44cm の不整形な長楕円形プランである。遺物は土器が 121 点出土したが、図示できるものはなかった。

SK4 (図13)

1A 区西端 SD12 の東側に位置し北側が搅乱に切られている。検出部分では楕円形プランを呈し、検出長 86cm、深さ 10cm を測る。遺物は全く出土しなかった。



- | | | |
|-----------------|----------------------|------------------------------|
| 1 黒褐色土（耕作土） | 5 暗褐色土（黄色粘土ブロック若干含む） | 13 暗褐色土 |
| 2 黄褐色土（透成土） | 6 黒褐色土（黄色粘土ブロック多く含む） | 14 黄灰褐色土 |
| 2-1 灰褐色土（透成土） | 7 暗褐色土（黑色土多く含む） | 15 黑褐色土（暗褐色土ブロック、黄色粘土ブロック含む） |
| 2-2 綿状暗褐色土（透成土） | 8 暗褐色土 | 16 黄色粘土（褐色土若干含む） |
| 2-4 灰色粘土（透成土） | 9 暗褐色土（黄色粘土含む） | 17 黑褐色土（暗褐色土ブロック、黄色粘土ブロック含む） |
| 2-5 暗褐色土（透成土） | 10 暗褐色土（黄色粘土多く含む） | 18 侏儒黄色粘土 |
| 2-6 淡灰色粘土（透成土） | 11 黒褐色土（褐色土ブロック含む） | |
| 3 黑褐色土 | 12 暗褐色土 | |

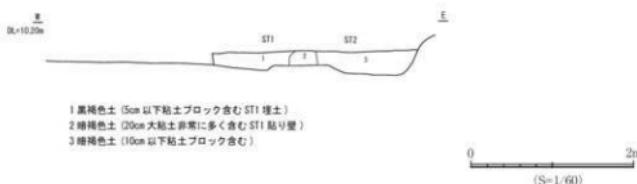


図6 ST1・2遺構図

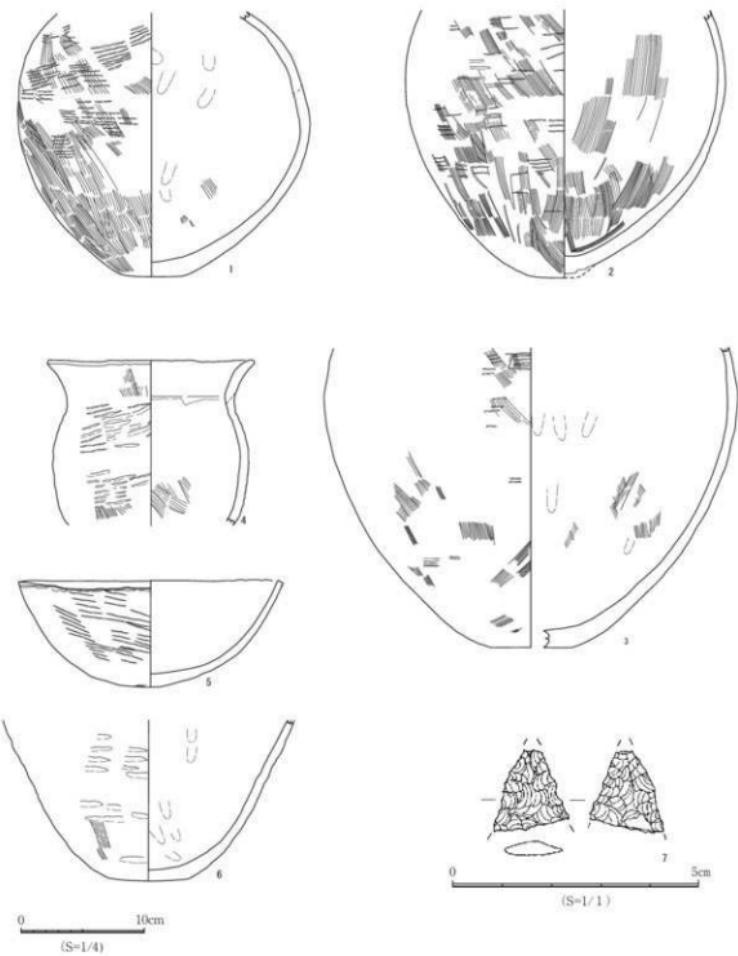


図 7 ST1 · 2 出土遺物実測図

SK6 (図 13)

1A 区 SD12 に接しており、西側は SD8 に切られている。平面椭円形プランを呈し、長軸 220cm 以上、短軸 94cm、深さ 10cm である。非常に浅く、掘り方は不明瞭である。底面に細かな凹凸が多数あり、根摺乱の可能性もある。遺物は土器が 5 点出土したが、図示できるものはなかった。

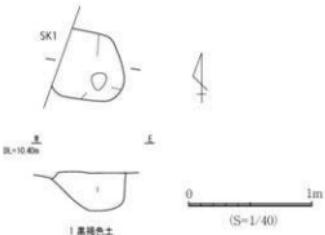


図8 SK1遺構図

SK7 (図 13)

1A 区 SD12 内に掘り込まれている。椭円形の土坑が 2 つ連なった形をしており、南西部分が深い。長軸 150cm、短軸 54cm で深さ 14cm である。埋土は黒褐色土である。遺物は土器が 3 点出土したが、図示できるものはなかった。

SK8 (図 13・14)

1A 区 SD12 内に掘り込まれている。椭円形プランで長軸 123cm、短軸 72cm、深さ 25cm である。埋土は黒褐色粘土である。遺物は土器が 11 点出土したが、図示できるものはなかった。

SK9 (図 13・14)

1A 区 SD12 内に掘り込まれている。長楕円形プランを呈し、長軸 124cm、短軸 45cm、深さ 26cm である。埋土は上層が黒褐色土で下層は淡暗褐色粘土である。遺物は全く出土しなかった。

SK11 (図 12)

1A 区 SD3 内に掘り込まれている。椭円形で長軸 124cm、短軸 52cm、深さ 30cm である。遺物は全く出土しなかった。

SK12 (図 10)

1B 区 SD14 に隣接している。南側は造成による擾乱で壊されている。不整形で長さ 386cm、幅 380cm、深さ 10cm である。埋土は黒色土で掘り方が不明瞭である。遺物は土器が 2 点出土したが、図示できるものはなかった。

SK15 (図 18)

2 区 SK16 の北に位置する。本来は椭円形をしていたと思われるが、北部および南側上面は耕作による擾乱を受けており、全体形を確認できなかった。長さ 230cm、幅 120cm 以上、深さ 14cm である。遺物は土器が 9 点出土したが、図示できるものはなかった。

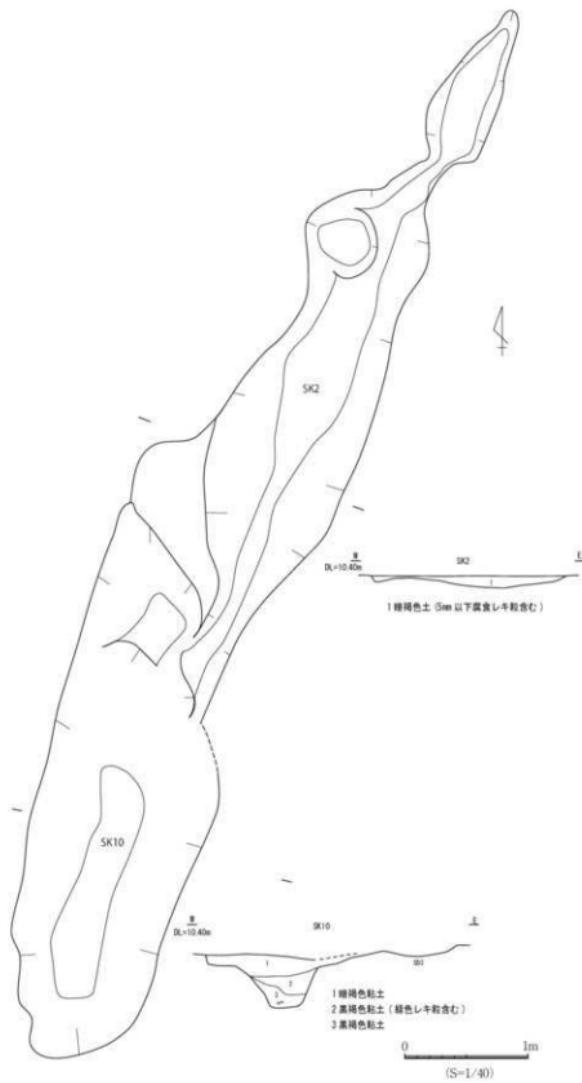


図9 SK2・10遺構図

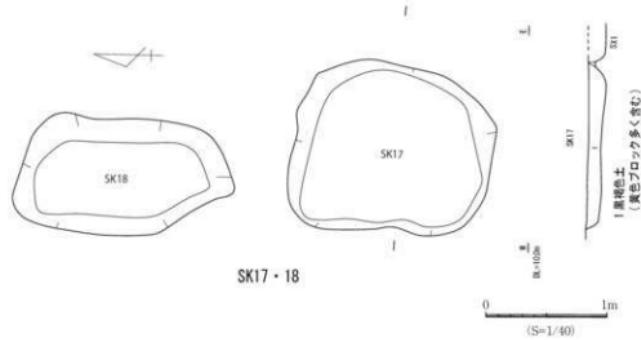
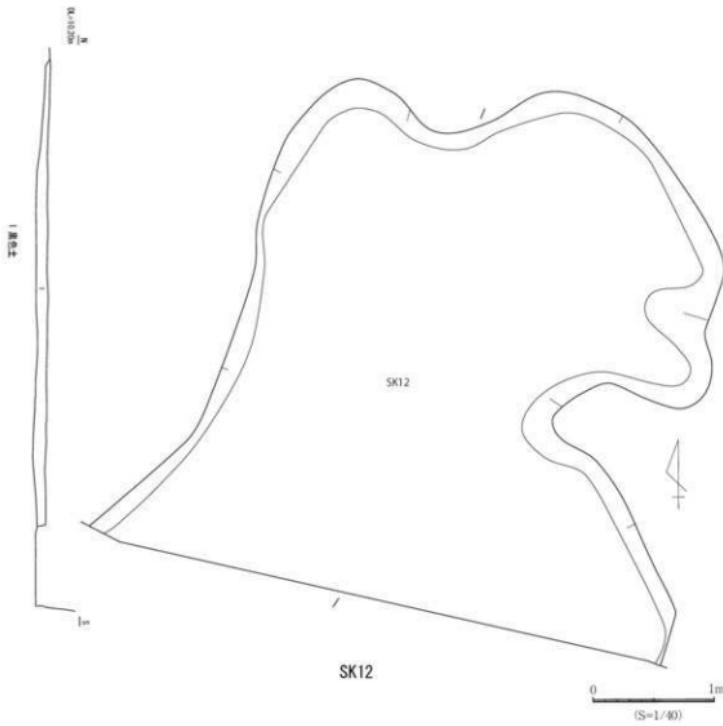


図10 SK12・17・18遺構図

SK16 (図 18)

2 区 SD18 につながっている。不整長楕円形のプランを呈し、長軸 410cm、短軸 120cm、深さ 8cm である。埋土は黒褐色土である。遺物は土器が 29 点出土したが、図示できるものはなかった。

SK17 (図 10)

2 区 SX1 の西に接する。不整円形プランを呈し、長軸 164cm、短軸 140cm、深さ 15cm である。埋土は黒褐色土である。遺物は 4 点出土したが、図示できるものはなかった。

SK18 (図 10)

2 区 SX1 の西に位置する。不整楕円形プランを呈し、長軸 180cm、短軸 94cm、深さは 5cm 程しかない。遺物は 4 点出土したが、図示できるものはなかった。

(3) 溝状遺構

SD1 (図 11・16)

1A 区 東端に位置する。南北方向に直線的に伸びている。溝内に洲状の高まりがいくつかあり、何回か掘り直されていると考えられるが、埋土の違いを明確にすることはできなかった。全体の幅は 129cm、深さ 12cm である。埋土は暗褐色土で、場所によっては底面に砂の堆積もある。遺物は 73 点出土したうち、4 点を図示した。8 は須恵器蓋で復元径は 11.5cm である。内外面は回転ナデで、天井部外面はヘラケズリである。9 は縁釉陶器皿底部である。須恵質の素地で薄緑色の釉が高台を含む全体に施釉されている。10 は土師器高台付杯である。内外面回転ナデで口縁部が外反している。11 は石錘である。砂岩の円礫の両端を打ち欠いている。

SD2・3 (図 12・16)

1A 区 中央東寄りに位置する。南北方向に延びており、平面プランは SD2 の途中から SD3 が分岐して二又に分かれる。断面観察では、SD3 廃絶後に SD2 を掘り直したことが分かる。SD2 は幅 87cm、深さ 7cm である。南側が造成による擾乱で切られている。SD3 は幅 75cm、深さ 12cm である。溝内に SK11 が掘り込まれている。南側が造成による擾乱で切られているが、位置関係から 2 区の SD18 につながる可能性がある。

遺物は、SD2 から土器片 92 点、須恵器片 3 点出土し、1 点を図示した。12 は土師器高杯の脚部である。杯部との接合面で剥がれている。SD3 からは土器片が 55 点出土したが、図示できるものはなかった。

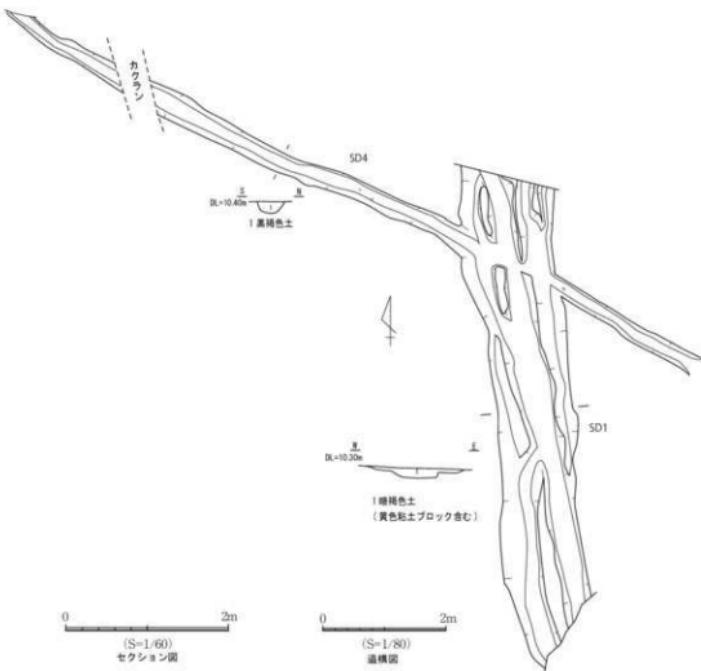


図 11 SD1・4 造構図

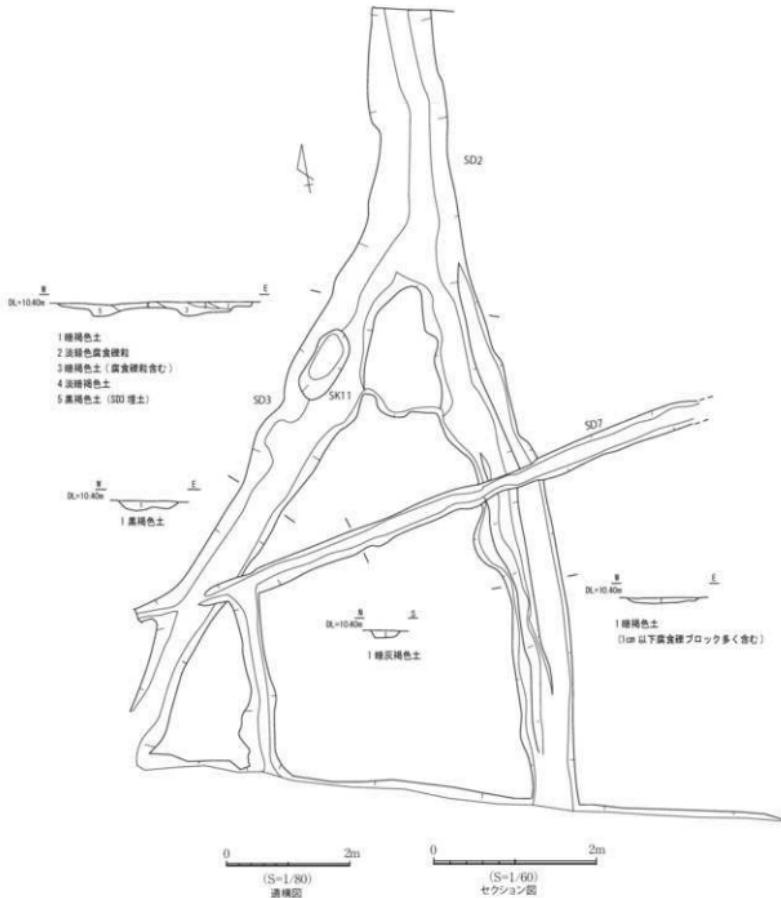


図12 SD2・3・7・SK11遺構図

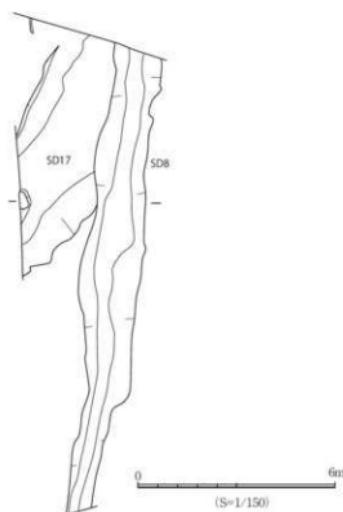
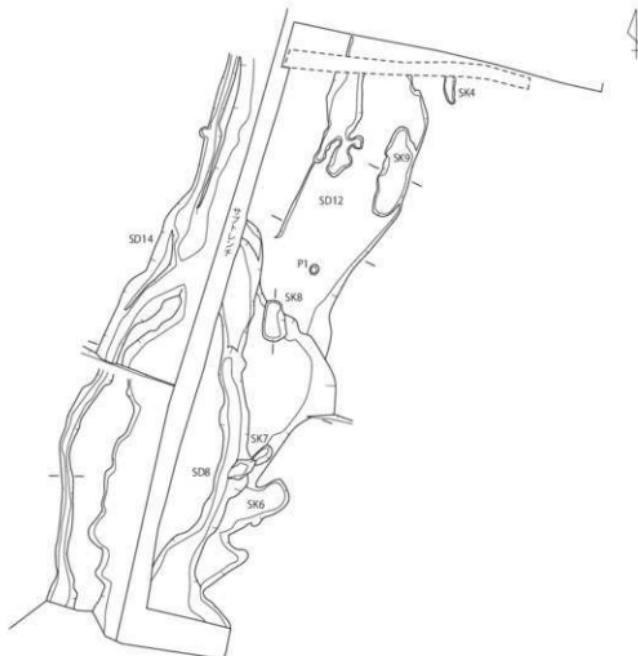


図13 SD8・12・14・17・SK4・6・7・8・9遺構図

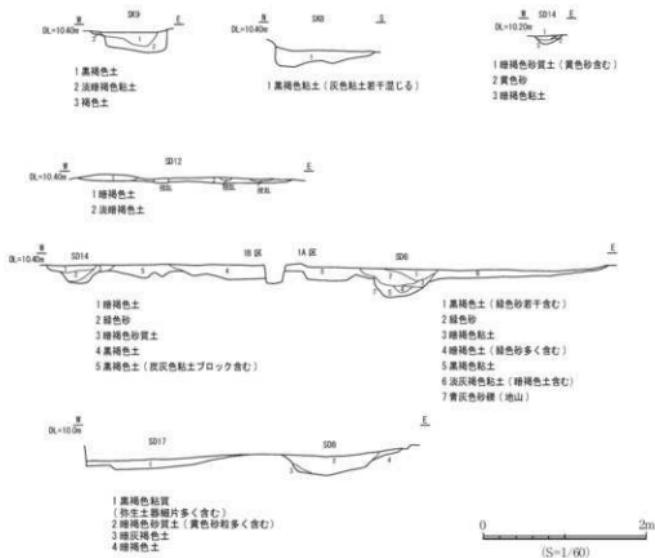


図14 SD8・12・14・17・SK8・9 土層図

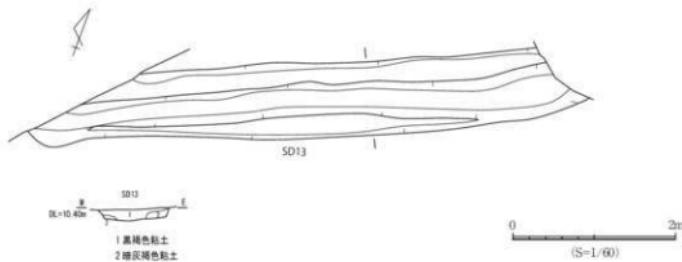


図15 SD13構造図

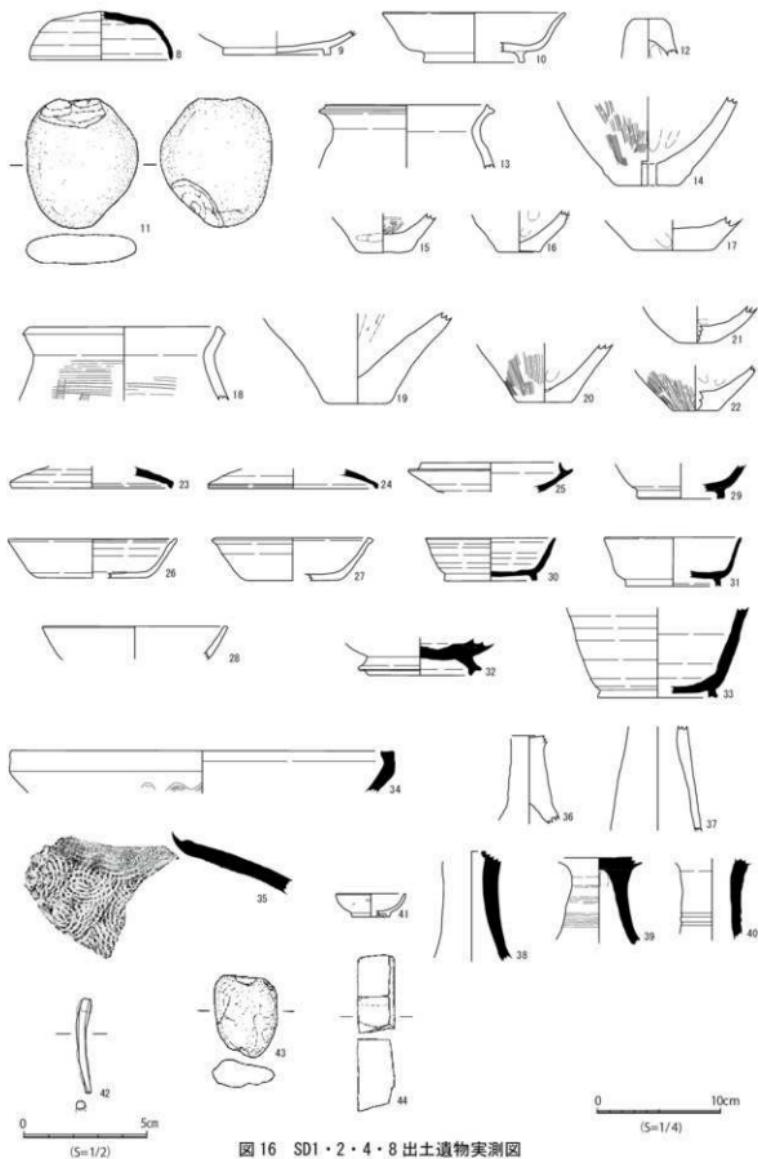


図 16 SD1・2・4・8 出土遺物実測図

SD4 (図 11・16)

1A 区東端に位置する。東西方向に延びており、SD1 に切られている。幅 34cm、深さ 15cm である。遺物は土器が 63 点出土したうち 5 点を図示した。13～17 は弥生土器である。13 は甕口縁部である。口縁を拡張して凹線文を施している。14 は甕底部である。底部中央を焼成後穿孔している。15～17 は平底の底部である。

SD5～7・9～11

1A 区に位置する。いずれも直線的に延びており幅が 30～35cm 程度、深さ約 10cm である。埋土は暗灰褐色土である。SD7 の方位は N79° E である。水田区画や土地区画等の溝ではないかと思われる。遺物はほとんど含んでおらず、図示できるものはなかった。

SD8 (図 13・14・16)

1A 区から 2 区にまたがって検出した。排水のためのトレーナーで北端の東肩等一部遺構を切っている。南北方向に延びており、SD12・17 を切っている。幅は 96～157cm、深さは 24～45cm と場所によって大きく異なる。

遺物は 1,000 点を超える遺物が出土し、今回の調査で最も遺物を含んだ遺構である。そのうち 26 点を図示した。18 は土師器甕口縁部である。肩部外面に縱ハケ後横ハケ、肩部内面に横ハケを施す。19～22 は弥生土器底部である。23・24 は須恵器杯蓋である。26～28 は土師器杯である。26・27 は内面の口縁端部に沈線が巡る。底部切り離しはヘラ切りである。25・29～31 は須恵器杯である。25 はかえりがあり、復元径は 11.6cm である。30 は復元径 10.6cm で底部に高台が付く。内面口縁部付近にタール状の黒色付着物がある。SX1 から出土した口縁部破片と接合した。31 は復元径 11.2 cm で同じく高台が付く。焼成が良くないためやや軟質で内面が炭素吸着のためや黒色となっていいる。32・33 は須恵器壺である。32 は脚部で高台端部が大きく二股に分かれている。33 は高台が付き、底部から頸部にかけて残存しており、直線的に立ちあがっている。34・35 は須恵器甕である。34 は口縁部である。頸部のくびれ付近に波状文が施されている。35 は頸部から胴部にかけての破片であり、内面にタタキによる青海波文が残る。36・37 は土師器高坏脚部である。36 は棒状粘土塊による脚部であり、赤色を呈する。37 は筒状の脚部で、にぶい黄橙色を呈する。38～40 は須恵器高坏脚部である。38 は焼成が甘く、軟質で灰白色を呈する。39 は 38 同様焼成が甘く、素地は灰白色であるが、器面は撻されて炭素吸着させたように黒色を呈する。40 は焼成良好で、灰色を呈する。下部に 2 条の並行沈線が施されている。SD8 は高坏の出土数が多いことが大きな特徴であり、個体ごとに色調が異なる。41 は染付の猪口である。復元径 5.6cm と非常に小さい。混入と考えられる。42 は鉄釘である。鉄錐の可能性もある。断面方形で残存長 4.9cm である。43 は石錐である。長さ 6.5 cm、重さ 93g で両端を打ち欠いている。44 は泥岩の砥石で、台形状の石材側面 4 面を使用している。

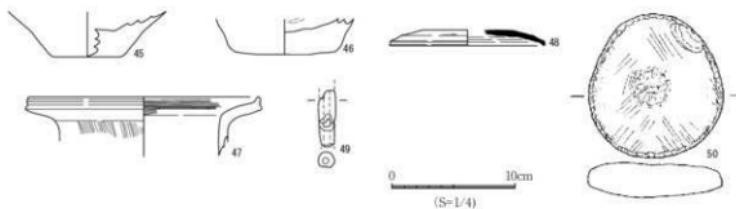


図 17 SD17 · 18 出土遺物実測図

SD12 · 17 (図 13 · 14 · 17)

1A 区で SD12 を、2 区で SD17 を検出した。位置関係や埋土等から同じ遺構と考えられる。幅約 265cm、深さ 8 ~ 24cm である。SD12 内に SK9 が掘り込まれている。

SD12 の遺物は土器 2 点のみで図示できるものはなかった。SD17 の遺物は 384 点出土したうち、2 点を図示した。45 · 46 は弥生土器底部である。ともに平底で 45 は復元底径 5.6cm、46 は 8.4cm である。

SD13 (図 15)

1B 区北西隅に位置する。南西方向に直線的に延び、幅 88cm、深さ 14cm である。埋土は上層が黒褐色粘土で、下層が暗灰褐色粘土である。遺物は土器が 12 点出土したが、図示できるものはなかった。

SD14 (図 13 · 14)

1B 区に位置する。南北方向に延びており、北端は SD8 と並行する。SD8 と切り合いがあるかは確認できなかった。幅は 30 ~ 83cm、深さ 22cm である。埋土は底面に暗褐色粘土が堆積した後、黄色砂、暗褐色砂質土が順に堆積している。遺物は土器が 31 点、須恵器が 6 点出土したが、図示できるものはなかった。

SD16 (図 18)

2 区 SX1 に接している。幅 58cm、深さ 15cm である。埋土は暗褐色土で遺物は全く出土しなかった。

SD18 (図 17 · 18)

2 区 SX1 東に位置する。南北方向に延びており、SK16 とつながっている。幅 193cm、深さ 19cm である。遺物は土器が 80 点、須恵器が 1 点、石器 1 点出土したうち、3 点を図示した。47 は土師器壺である。復元径 18.8cm で口縁端部を横ナデにより拡張させており、凹線状に凹んでいる。胴部外面は縦方向のハケ目が施されている。48 は須恵器蓋である。復元径は 12.8cm で、外面は回転ケズリが施されている。49 は管状土錐である。直径 0.5cm の穴が開いている。50 は敲石である。石材

は砂岩で側面と表裏中心部に敲打痕がある。

(5) その他の遺構・遺物

SX1 (図 18・19)

2 区中央で検出した性格不明遺構である。

東西約 630cm、南北 840cm 以上、深さ 20cm で平面プランは長方形に近い形状をしている。東辺は SD18 が接しており、それに合流するように SX1 からも SD16 が枝分かれして延びている。埋土は包含層と同じ灰色土を含む暗褐色土が落ち込むように上に覆いかぶさっており、その下に暗褐色土が堆積している。SD16 と非常に類似した土が堆積しているため、同時併存と考えている。

遺物は土器 354 点、石器 1 点が出土したうち、4 点を図示した。51 は土師器高环脚部である。内面にしづり痕が残る。52 は須恵器高环である。脚部との接合部で割れている。53 は須恵器鉢である。口縁部は内湾し、胴部から底部にかけて尖底状を呈する鉄鉢形である。復元径は 18.2cm で胴部外面はケズリが施されている。54 は砥石である。石材は砂岩で、上面と左側面を使用している。

包含層出土遺物 (図 20)

今回の調査では、遺構外から弥生土器や須恵器、陶磁器、鉄器、土製品などが出土した。そのうち 14 点を図示した。55 は弥生土器底部である。平底で復元底径 9.6cm である。56 は青花の脚部である。方形の脚部の角部で豊付は露胎である。特殊な製品であり、類例としては、山口市の問田片川遺跡第 8 号墓で出土した完形の双耳付角形花瓶がある。57 は鉄製刀子で基部と先端が欠損しており、残存長は 8.2cm である。58 は瓦質土器の羽釜である。復元口径は 14.6cm である。59 は管状土錘である。60 は備前焼の甕である。口縁部が肥厚しており、復元径は 39.4cm である。61 は丸瓦である。凹面の切り離し痕跡はコビキ A である。62 は平瓦である。凸面は繩目、凹面は布目痕が残っている。63 は青磁碗底部である。外面ケズリで高台内は露胎である。64 は青花皿底部である。豊付は露胎で内面見込みに玉取獅子文を描く。65 は白磁皿である。口縁部は端反りで復元径 14.2cm である。外面底部と内面見込みは露胎である。66 は染付碗底部である。67 は能茶山焼の染付碗である。68 は磨製石斧の基部である。石材は蛇紋岩で刃部が欠損している。

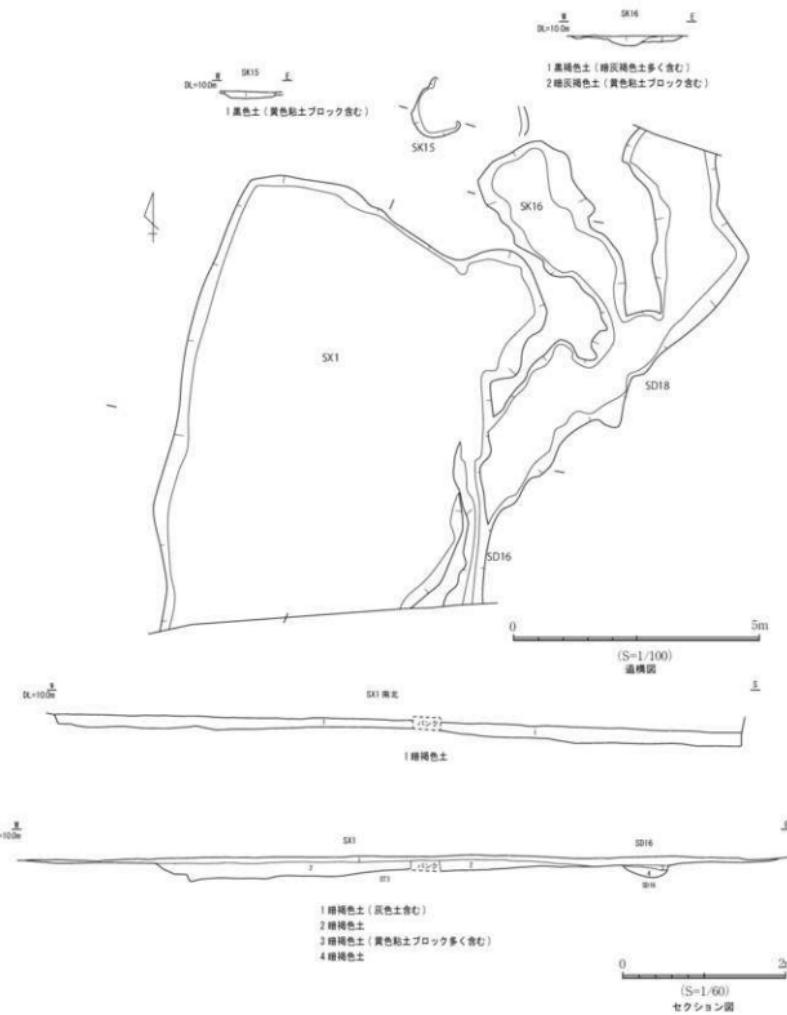


図18 SX1・SD16・18・SK15・16遺構図

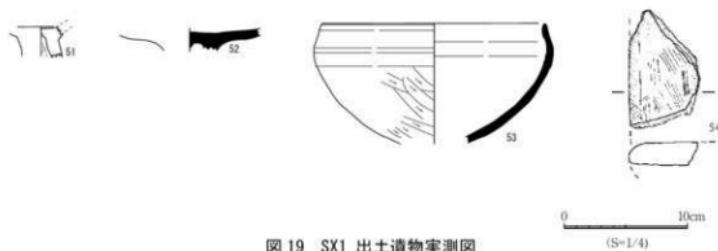


図 19 SX1 出土遺物実測図

(S=1/4)

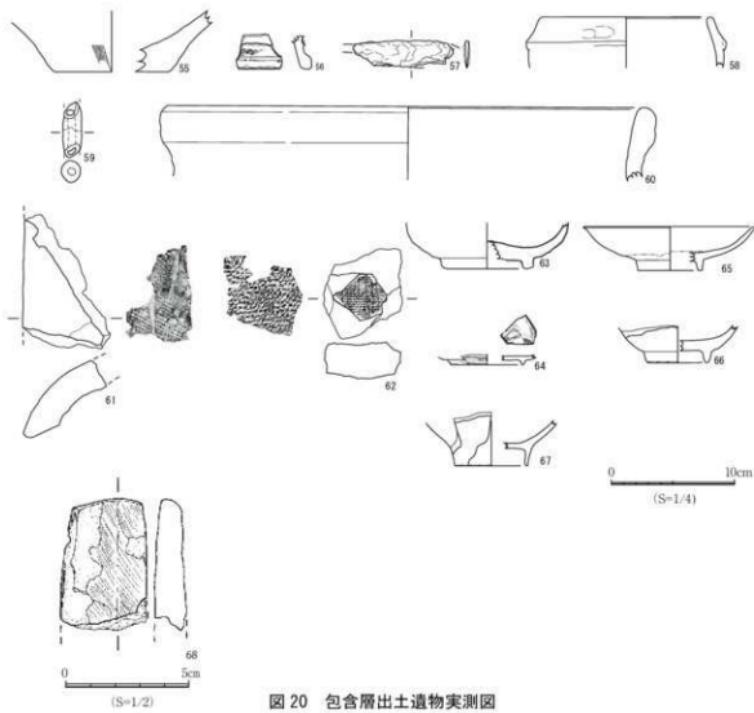


図 20 包含層出土遺物実測図

(S=1/2)

表1 出土土器観察表

図面番号	遺物番号	遺構名・取上位置	種別	器種・部位	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	特徴・調整	胎土
図7	1	ST1	弥生土器	甌		(21.5)	5.4	外面タタキ後ハケ。内面ハケ後ナデ	砂粒やや多い
図7	2	ST1	弥生土器	甌		(22.0)	(4.0)	外面タタキ後ハケ。内面ハケ後ナデ	砂粒やや少ない
図7	3	ST1	弥生土器	甌		(24.6)	(6.3)	外面タタキ後ナデ。ハケ。内面ハケ後ナデ	砂粒やや多い
図7	4	ST1	弥生土器	甌	(16.8)	(13.6)		外面タタキ。口縁・下胴部ハケ。内面ナデ。下胴部ハケ	砂粒やや多い
図7	5	ST1	弥生土器	鉢	21.0	7.6		外面タタキ後ナデ。内面ナデ。丸底	砂粒やや少ない
図7	6	ST1	弥生土器	鉢		(13.2)	(6.6)	全体的に摩滅。外面タタキ。内面ナデ	砂粒やや多い
図16	8	SD1	須恵器	蓋	(11.5)	4.0		外面回転ナデ。天井ヘラケズリ。内面回転ナデ	砂粒少ない
図16	9	SD1	縄鞆陶器	皿 底部		(1.9)	(8.8)	須恵質の素地。薄緑色全面施釉、輪高台	緻密
図16	10	SD1	土師器	杯	(14.8)	4.1	(8.2)	外面回転ナデ。内面回転ナデ	砂粒少ない
図16	12	SD2	土師器	高杯 脚部		(4.8)		外面摩滅。内面ナデ	砂粒やや少ない
図16	13	SD4	弥生土器	甌	(13.2)	(5.2)		口縁部凹線文。外面ナデ。内面ナデ	砂粒やや多い
図16	14	SD4	弥生土器	甌 底部		(7.3)	(4.8)	底面に施成後空孔。外面ナデ。ハケ。内面ナデ	砂粒やや多い
図16	15	SD4	弥生土器	底盤		(3.2)	3.0	外面ナデ。内面ナデ。ミガキ	砂粒少ない
図16	16	SD4	弥生土器	底盤		(3.4)	3.4	外面ナデ。内面ナデ	砂粒少ない
図16	17	SD4	弥生土器	底盤		(2.7)	(6.8)	外面ナデ。内面摩滅	砂粒少ない
図16	18	SD8	土師器	甌	(15.4)	(6.0)		外面ナデ。ハケ。内面ナデ。ハケ	砂粒少ない
図16	19	SD8	弥生土器	甌 底部		(7.4)	(5.0)	外面タタキ後ナデ。内面ナデ。丸底一部ケズリ	砂粒やや多い
図16	20	SD8	弥生土器	底盤		(4.8)	(4.4)	外面ハケ。内面ナデ	砂粒やや多い
図16	21	SD8	弥生土器	底盤		(3.0)	3.2	外面ナデ。内面ナデ	砂粒やや多い
図16	22	SD8	弥生土器	底盤		(3.7)	(3.8)	外面ハケ。内面ナデ	砂粒やや多い
図16	23	SD8	須恵器	蓋	(13.2)	(1.8)		外面回転ナデ。内面ナデ	砂粒少ない
図16	24	SD8	須恵器	蓋	(13.8)	(1.6)		外面回転ナデ。内面回転ナデ	砂粒少ない
図16	25	SD8	須恵器	杯	(11.6)	(2.4)		外面回転ナデ。内面回転ナデ	砂粒少ない
図16	26	SD8	土師器	杯	(13.8)	3.2	(9.3)	外面回転ナデ。内面回転ナデ。口唇部に沈窓。底盤へラ切り	砂粒少ない
図16	27	SD8	土師器	杯	(12.6)	3.5	(7.6)	外面回転ナデ。ミガキ。内面ナデ。ミガキ。口唇部沈窓。底盤へラ切り	緻密
図16	28	SD8	土師器	杯 口縁部	(15.0)	(3.6)		外面ナデ。内面ナデ	砂粒少ない
図16	29	SD8	須恵器	杯		(2.9)	(7.2)	外面ナデ。内面ナデ	砂粒少ない
図16	30	SD8 SX1	須恵器	杯	(10.6)	3.5	7.6	外面回転ナデ。内面回転ナデ。内面口縁部付近にタール状付着物	緻密
図16	31	SD8	須恵器	杯	(11.2)	4.0	(7.8)	外面ナデ。内面ナデ。焼成が甘いためやや軟質。内面炭素吸着のためやや黒色	緻密
図16	32	SD8	須恵器	甌 底部		(3.1)	(10.2)	外面回転ナデ。内面回転ナデ	砂粒やや少ない
図16	33	SD8	須恵器	甌		(7.4)	(9.8)	外面回転ナデ。内面回転ナデ	緻密
図16	34	SD8	須恵器	甌 口縁部	(31.4)	(3.5)		口縁下に波状文。外面ナデ。内面ナデ	砂粒やや少ない
図16	35	SD8	須恵器	甌 脚部				外面カキ目。内面ナデ。青海波文タタキ	砂粒やや少ない
図16	36	SD8	土師器	高杯 脚部		(7.2)		赤色を呈する。軟質で全体的に摩滅	砂粒やや少ない
図16	37	SD8	土師器	高杯 脚部		(8.5)		外面ナデ。内面ナデ	砂粒やや多い

図面番号	遺物番号	遺構名・取上位置	種別	器種・部位	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	特徴・調整	胎土
図16	38	SD8	須恵器	高杯 脚部		(9.0)		外面摩滅、内面ナデ。焼成が甘いため白色を呈する	緻密
図16	39	SD8	須恵器	高杯 脚部		(7.0)		外面ナデ。内面ナデ、焼成が甘いため断面白色で表面は炭素吸着のため黒色を呈する	緻密
図16	40	SD8	須恵器	高杯 脚部		(6.8)		沈線2条、外面ナデ、内面ナデ	砂粒少ない
図16	41	SD8	染付	縁口	(5.6)	1.9	(30)	縁付露胎	緻密
図17	45	SD17	弥生土器	底部		(37)	(5.6)	外面ナデ、内面ナデ	砂粒多い
図17	46	SD17	弥生土器	底部		(29)	(84)	外面摩滅、内面ナデ	砂粒やや多い
図17	47	SD18	土師器	縁 口縁部	(18.8)	(4.8)		口唇部凹縁状、外面ナデ、ハケ、内面ナデ、ハケ	砂粒やや多い
図17	48	SD18	須恵器	蓋	(12.8)	1.3		外面回転ナデ、回転ケズリ、内面回転ナデ、ナデ	砂粒やや少ない
図19	51	SX1	須恵器	高杯 脚部		(25)		外面ナデ、内面ナデ、脚内部しづり痕	砂粒少ない
図19	52	SX1	須恵器	高杯 杯部		(17)		外面回転ナデ、内面ナデ	砂粒やや少ない
図19	53	SX1	須恵器	鉢	(18.2)	(9.9)		外面回転ナデ、脚部ケズリ、内面回転ナデ、ナデ、鉄跡形	砂粒少ない
図20	55	1B区包含層	弥生土器	底部		(5.0)	(9.6)	外面ナデ、ハケ、内面ナデ	砂粒多い
図20	56	1A区包含層	青花	脚部		(2.7)		方形脚部、縁付露胎	緻密
図20	58	1A区遺構横出面	瓦質土器	羽釜 口縁部	(14.6)	(4.2)		外面ナデ、内面ナデ	砂粒やや多い
図20	60	1A区	焼前焼	甕 口縁部	(39.4)	(6.0)		外面回転ナデ、口縁肥厚、内面回転ナデ	緻密
図20	63	1区表土	青磁	甕 底部		(3.8)	(7.4)	高台内露胎、外面ケズリ	緻密
図20	64	1A区遺構横出面	青花	甕 底部		(0.8)	(5.8)	縁付露胎、見込みに支桟	緻密
図20	65	1A区遺構横出面	白磁	甕	(14.2)	3.6	(5.2)	口縁瀧反り、外面底部付近と内面見込み露胎	緻密
図20	66	1区表土	染付	甕 底部		(3.0)	(5.0)		緻密
図20	67	1A区	染付	甕 底部		(3.8)	(5.8)		緻密

表2 出土土製品観察表

図面番号	遺物番号	遺構名・取上位置	器種	全長(cm)	全幅(cm)	全厚(cm)	重さ(g)	特徴	胎土
図17	49	SD18	土鍤	(4.6)	(1.4)		(6)	ナデ、孔径0.5cm	緻密
図20	59	2区遺構検出面	土鍤	(4.2)	1.5		(11)	ナデ、孔径0.6cm	緻密
図20	61	1A区遺構検出面	丸瓦	(8.8)	(6.8)	(2.5)	(234)	凸面ナデ、凹面コビキA	砂粒や多い
図20	62	2区遺構検出面	平瓦	(6.4)	(6.4)	(2.8)	(130)	凸面縫目、凹面布目	砂粒や少ない

表3 出土石器観察表

図面番号	遺物番号	遺構名・取上位置	器種	全長(cm)	全幅(cm)	全厚(cm)	重さ(g)	特徴	材質
図7	7	ST2	石鏨	(1.6)	(1.4)	(0.3)	(0.1)	先端、基部欠損	チャート
図16	11	SD1	打欠石鏨	10.5	9.0	2.4	350	両面とも片面から打欠き	砂岩
図16	43	SD8	打欠石鏨	6.5	5.1	2.3	93		圧力変性を受けた砂岩
図16	44	SD8	砥石	(6.2)	(3.0)	(5.9)	(166)	側面4面使用	泥岩
図17	50	SD18	敲石	11.8	11.1	2.9	580	側面と表裏中心部に敲打痕	砂岩
図19	54	SXI 梱出面	砥石	(9.6)	(5.7)	(1.9)	(146)	上面、左側面使用	砂岩
図20	68	1A区表土	磨製石斧	(5.4)	(3.5)	(1.2)	(45)	刃部欠損。全体に擦痕あり。	蛇紋岩
-	69	ST1	鍛石	8.6	7.5	3.7	198	小孔多数	軽石

表4 出土鉄器観察表

図面番号	遺物番号	遺構名・取上位置	器種	全長(cm)	全幅(cm)	全厚(cm)	重さ(g)	特徴
図16	42	SD8	釘	(4.9)	(0.4)	(0.3)	(1)	
図20	57	2区包含層	刀子	(8.2)	(2.1)	(0.4)	(15)	基部、先端欠損

第Ⅳ章 総括

今回の調査区は後世の削平や搅乱の影響を受けており、検出した遺構は浅いもののが多かったが、堅穴建物跡2棟、土坑18基、溝状遺構17条、性格不明遺構1基、ピット等を検出した。遺物から見た時期は弥生時代後期、古墳時代後期、古代、中世後期、近世と幅広い年代を示している。ここでは、本調査区から丘陵を挟んで西側で行われた四国横断自動車道建設に伴う発掘調査の成果（以下、西調査区という）と合わせて、以下に簡単ではあるが時期ごとの傾向についてまとめる。

1. 弥生時代

栄工田遺跡では初めてとなる弥生時代後期末の堅穴建物跡を2棟確認した。他にもSD4やSD17なども当該期の遺構と考えられる。西調査区のSD-29をはじめとした遺構や包含層などから同時期の遺物が数多く出土している。いずれも丘陵に近い位置でこの時期の遺構が見られるため、集落の中心は丘陵裾部に展開していたと想定できる。

また、時期は不明確であるが、SK6～9のように溝の中に岸に沿わせて掘り込んでいる土坑が見受けられる。これらは溝を流れる水を利用して水漬けなどを行う目的で掘られていた可能性がある。

2. 古代

遺構はSD1・8・18などの溝やSX1などが該当する。遺物は少量ではあるが、布目瓦や鉄鉢形の須恵器鉢、縁軸陶器など寺院関連の遺物が出土している。本調査区から北へ約400mの位置には奥谷南遺跡があり、丘陵部では、ロストル構造の須恵器窯跡や古代の平坦面が見つかっている。これらは山岳寺院関連施設ではないかと想定されている。寺院の広がりや内容等不明な点が多いが、今回の出土遺物に寺院関連の遺物が含まれることを考慮すると、奥谷南遺跡を中心とした広大な寺域が広がっていたかもしれない。

また、SD8からは複数の高杯が出土しており、水辺の祭祀の存在をうかがわせる。本調査区から南へ約400m下った山崎川周辺の山崎遺跡では陶馬が出土したことが知られている。胴体のみ残存しており、脚や首、尻尾を割って河に投げ込む河川祭祀が想定（岡本1979）されており、本調査の遺物も一連のものである可能性がある。

このように、奥谷南遺跡で山岳寺院、山崎遺跡で祭祀関係遺物が見つかっており、その中間にあたる本調査区で関連する遺物が確認されたことで、古代の岡豊地区の様相の一部を知ることができた。

3. 中世・近世

中世に属する遺構は確認できなかったが、中世の遺物が若干確認できた。特に、図20-56は方形の青花脚部のコーナー部分である。類例としては、山口市の問田片川遺跡第8号墓で出土した完形の双耳付角形花瓶がある。特殊な製品であり、本調査区の西に隣接する小野古城を拠点とした小野氏が入手したもの一部の可能性がある。

また、図20-61は糸切りのコピキAの丸瓦片が出土している。岡豊城の北の蓮如寺村には、「長宗我部地検帳」に「瓦 助次郎」の給地があることが知られており、瓦窯の場所は不明であるが、長宗我部氏が瓦工を抱えていたことを示している。この丸瓦もその関係で小野古城に持ち込まれたものの一部であろうか。これまで、岡豊城跡の発掘調査は進められてきたものの、その周辺の家臣團に関係する遺跡の調査は少なかったため、今後の調査例の増加に期待したい。

近世の遺構は確認できなかつたが、能茶山焼などの遺物が散見される。幕末には、小野古城の東麓に小野の聖人と言われた平井善之丞が閉居した場所があり、調査区周辺にも近世の村落が広がっていたと思われる。

また、SD5～7・9～11は遺物を伴わないため時期が不明であるが、埋土が古代以前のものと異なっており、中世以降の土地区画を示している可能性がある。

4.まとめ

今回の調査区は奥谷南遺跡から続く谷の出口であることから、弥生時代以降多くの溝が掘られている。本調査区より東側は湿地堆積となることが分かっており、これらの遺構は弥生時代以降の水利状況を示している。

また、岡豊地区は県内有数の古墳密集地帯として有名であるが、古墳以外の調査事例はまだ少ない。高知自動車道に伴う発掘調査で奥谷南遺跡や長畠古墳群など丘陵部で大規模調査をされているが、丘陵裾の平地部の調査事例は少なく、今回の調査が岡豊地区的平地部の様相を知る上で貴重な成果であると言える。

参考文献

- 松村信博・江戸秀輝『窓工田遺跡』(財)高知県文化財団埋蔵文化財センター 1995年
- 松村信博・山本純代『奥谷南遺跡II』(財)高知県文化財団埋蔵文化財センター 2000年
- 岡本健児 1979 「第3編古代第4章第3節考古学からみた祭祀と葬制」『南国市史』上巻
- 山口市教育委員会 1985 『問田片川遺跡』山口市埋蔵文化財調査報告第20集

写 真 図 版



調査前全景（南東から）



調査前全景（西から）



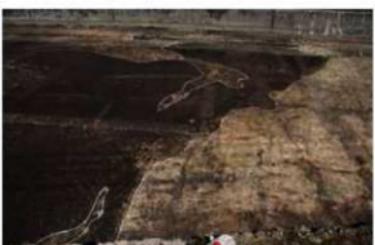
1A 区遺構検出状況（南西から）



1A 区東遺構検出状況（北東から）



1B 区遺構検出状況（南西から）



2 区遺構検出状況（南から）



2 区遺構検出状況（南西から）



2 区遺構検出状況（南西から）

図版 2



1A 区東遺構完掘状況（南西から）



1A 区東遺構完掘状況（北東から）



1B 区遺構完掘状況（南東から）



1B 区遺構完掘状況（南西から）

図版 4



2区遺構完掘状況（北西から）



2区遺構完掘状況（南西から）



2区遺構完掘状況（北東から）



1B区ST1・2完掘状況（南東から）

図版 6



1B 区 ST1・2 完掘状況（西から）



1B 区 ST1・2 切り合い検出状況（南から）



1B 区 ST1・2 土層堆積状況（南東から）



1B 区 ST1 壁際土層堆積状況（南西から）



1B 区 ST1 土層堆積状況（南東から）



1B 区 ST1 弥生土器（2）出土状況（東から）



1B 区 ST1 弥生土器（5）出土状況（西から）



1B 区 ST1 弥生土器（3）出土状況（西から）



1A 区 SK4 完掘状況（南から）



1A 区 SK6・7 完掘状況（西から）



1A 区 SK7 土層堆積状況（東から）



1A 区 SK8 土層堆積状況（西から）



1A 区 SK8 完掘状況（西から）



1A 区 SK9 検出状況（南東から）



1A 区 SK9 土層堆積状況（南から）



1A 区 SK9 完掘状況（南東から）

図版 8



1A 区 SK2・10 完掘状況（南から）



1A 区 SK11 完掘状況（南から）



1B 区 SK12 土層堆積状況（南西から）



2 区 SK15 土層堆積状況（南から）



2 区 SK16 土層堆積状況（南東から）



2 区 SK17 土層堆積状況（南東から）



2 区 SK17 完掘状況（南から）



2 区 SK18 完掘状況（南西から）



1A 区 SD1・4～6 完掘状況（南から）



1A 区 SD1 完掘状況（北から）



1A 区 SD2・3 検出状況（南東から）



1A 区 SD2・3 完掘状況（南東から）



1A 区 SD2・3 完掘状況（南西から）



1A 区 SD4 完掘状況（東から）



1A 区 SD4 弥生土器（15）出土状況（東から）



1A 区 SD7 土層堆積状況（西から）

図版 10



1A 区 SD8 · 12 検出状況（西から）



2 区 SD8 検出状況（南から）



1A 区 SD8 サブトレ断面土層堆積状況（南西から）



2 区 SD8 土層堆積状況（南から）



2 区 SD8 須恵器（30）出土状況（南から）



1A 区 SD8 須恵器（38）出土状況（東から）



1A 区 SD8 須恵器（33）出土状況（西から）



1A 区 SD8 須恵器（40）出土状況（西から）



1区 SD8・14 完掘状況（南西から）



1A区 SD8 完掘状況（南西から）



1A区 SD8・12 完掘状況（西から）



2区 SD8 完掘状況（南東から）



1B区 SD13 土層堆積状況（西から）



1B区 SD13 完掘状況（南西から）



1B区 SD14 土層堆積状況（南から）



2区 SD16 土層堆積状況（南から）

図版 12



2区 SD17 土層堆積状況（南東から）



2区 SD17 弥生土器（45）出土状況（南から）



2区 SD18 土層堆積状況（南から）



2区 SD18 須恵器（48）出土状況（北から）



2区 SX1 土層堆積状況（南西から）



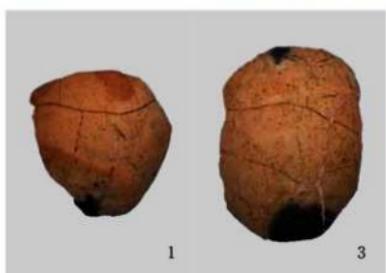
2区 SX1 土層堆積状況（北西から）



2区 SX1 須恵器（52）出土状況（北から）

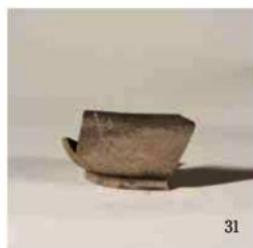
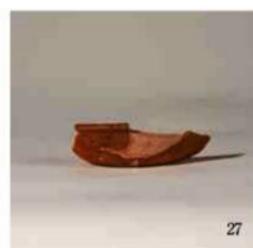
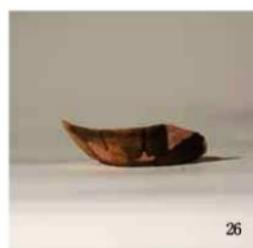
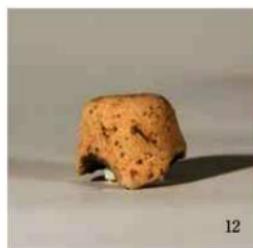


2区 SX1 完掘状況（北東から）



出土遺物 1

図版 14



出土遺物 2



出土遺物 3

図版 16



出土遺物 4

報告書抄録

栄工田遺跡

- 店舗造成開発工事に伴う発掘調査報告書 -

(南国市埋蔵文化財調査報告書 第27集)

2020年3月31日発行

発行 高知県南国市教育委員会
高知県南国市大塙甲2301
電話 (088) 880-6569

印刷 川北印刷株式会社